

## ある ある ある

### ※プレゼンソフトの活用

本日のお話では、まず中村久子(なかむら ひさこ)さんを紹介します。中村さんは明治30年(今から100以上も前)岐阜県飛騨高山に生まれました。2歳の時、突発性脱疽(だっそ)が原因で、両手・両足を失ってしまいます。

中村さんを愛し、慈しんで育てた父親も早くに病気で亡くなってしまいます。母親は中村さんが一人でも生きていけるように、身の回りのこと(例えば食事)、生計を立てること(例えば裁縫)をしつけていきます。母親もつらかったと思います。それでも慈愛にあふれた厳しさで、中村さんを育てていきました。当時のことですから、小学校に通うことも許されません。それでも、独学で勉強を人一倍しました。血のにじむような努力の結果、裁縫も一通りのことができるようになりました。針に糸を通したり、口で針をくわえ縫っていったり、糸の端に結び玉をつくったりすることもできます。10歳になったころ、近所のお友達にお人形の着物づくりを頼まれたのだそうです。中村さんは、それがうれしくて一生懸命に縫いました。それでも、口で針をくわえているのですから、着物に唾液がついてしまったのだといいます。それを知ったお友達の親が、「汚いから」という理由で着物をまとったお人形ごと捨ててしまったのだそうです。中村さんは、そのことが忘れられず、さらに13年間、さらに努力をし、唾液をつけることなく裁縫を仕上げる技を身に付けていくのです。中村さんには苦難が続きます。19歳の時、「見世物小屋」に売られてしまいました。手や足がなくとも、裁縫ができる、字を書ける…その「芸」をお客さんにみせお金をいただくということです。中村さんのお心、いかばかりであったのでしょうか。しかし、結婚もし、お子さんにも恵まれました。26年間続けた見世物小屋での芸人としての生活にもピリオドをうち、そのあとは講演活動などに尽力されました。

40歳くらいの頃、ヘレン・ケラー女史(目が見えない、音が聞こえない)とも対面したそうです。ヘレン・ケラー女史にご自身が縫い上げた日本人形を贈られたそうです。ヘレン・ケラー女史は「障害は不便です。でも不幸ではありません。」という言葉を残しています。中村さんは、その言葉の通り、前向きに物事を捉え、自らの心、内面を豊かにしていきました。中村さんは「何もない世界から、有を生み出す名人」だったのだそうです。書道や詩作にも才能をいかんなく発揮されました。

中村さんの晩年の詩です。

さわやかな 秋の朝 「タオル取ってちょうだい」「おーい」と答える良人がある  
「ハイ」という娘がおる  
歯を磨く 義歯の取り外し 顔を洗う 短いけれど  
指のないまるいつよい手が 何でもしてくれる  
断端に骨のない やわらかい腕もある 何でもしてくれる 短い手もある  
ある ある ある みんなある さわやかな 秋の朝

ここで、皆さん一人一人が自分自身を振り返ってほしいのです。中村さんの詩は「あるある ある」です。皆さんは「〇〇がない」「〇〇してくれない」…「ない ない ない」になっていないでしょうか。「ある」ことには鈍感で、「ない」ことにだけ敏感になっていないでしょうか。曾野綾子さんという作家の著書「老いの才覚」には次のような言葉があります。「どんな若い人でも『くれない』と言い出した時が、その人の老いの始まりです」「何をしてもらうかではなく、何ができるかを考えましょう」

改めて、皆さんの身の回りの「ある」に目を向けてほしいです。周りの人にしてもらってうれしかったことはありましたか、反面、自分自身が周りの人にしたことは何ですか。よく考えることが大切です。先月28日、1年生は「生命の授業」を受けました。その感想「毎日あたりまえのように生きているけれど、毎日生きていることは奇蹟なんだなと思いました」の通りだと思います。人権旬間は、今月15日までです。